原矢を射かけ、光世の眼にあたる。卿人忽ち罰を蒙り、報事甚し、是に依て宮造し、就刑大明神と号て今に祭り・云々。

とあつて、光世、光国という平家の落武者にからまる怨霊祭祀をのべている。この縁起（由来）にある神社は因尾の三靈江、前高両神社と直川の射切神社であるが、今一つ牛の頭大明神というのが出ている。これは光世の殺した牛の頭を玄負という山居人（山伏）が祀つたことになつているが、説話の形態は熊野牛王社の伝承を誤伝したもので、牛頭天王つまり牛王祭祀をのべたものである。（宝暦の御領分中寺社記によれば上直見、中野、因尾にかけて牛王社は八カ所ある）三靈江明神は光世を祀り、前高明神は光国を祀つている。この二社ははつきりした御霊信仰（怨霊を祀る）であるから問題はないが、就刑大明神には問題がある。就刑明神は現在の射切神社といわれる。体石博美氏の『射切社由来記』（佐伯史談第二十号）によると、祭神は市杵島姫命、田心姫命、湍津姫命の三柱で厳島明神であるとしているが、この三女神は宗像三柱大神である。この社祠は宝暦御領分中寺社記には、上直見村薗の大明神と記され、射切社の神号は見あたらない。射切神社が光世伝説の就刑大明神であるなれば、これは当然光世の霊を祀つたもので御霊社である。なお三靈江、前高両神社はおそらく御霊社であるとともに、因尾柳井一党の地主神であろう。（光世、光国の伝説は柳井一族の祭祀を語る説話であると思う。）

（本会会員・佐伯市下堅田、事志河内）

研究

亡びゆく堅田路の庵寺

岩田正城

早春の一日、堅田路を目ざして佐伯大橋に到れば、左手に上久部東禅寺の本堂の瓦が望見される。舗装工事半ばの久部津留を過つて中山トンネルを過ぎれば田崎（左ぶち）である。

右手の山の中腹にあるのが天徳寺であり、その道を行けば上城（かみじょう）光久寺があり、更に道は大越川にそうて岸河内の中央を貫き、長覆原の古戦場を左に見て大越に達し、直川村改家に抜けている。近日高木会長のお計らいで、この道の改家から柴を越して大越、岸河内と下る自動車での走行がこころみられることに寄つていて、往時交通の状態はどうであつたか、どんな事物の研究が出来るか、楽しみにしている。

さて田崎から道を直進すれば汐月で、右手に栗本領寺派真正寺がある。慶長十八年の創建と伝えられ、当時は天台宗に属し法音寺と号していた由で、法音寺の地名は今も残つている。

左手の村が柏丘であり、龍王山麓に江田寺があり、堅田川の流れを前にして禅寺の威儀を正した佇たずまいを見せている。年来の河川工事によつて雄大な堤防がほぼ完成し、道路が高くなり山門の石段も高い左右の石垣も半ば土中に埋もつて、わずかに頭だけを出していると言つた感じである。寺の威容が失われた、景観がそこなわれたと村の人は嘆いている。正に予想出来ない世の中の推移である。

更に泥谷には正明寺、浪越には別の常楽寺が幾百年の

歴史を秘めて現存している。

この様に大寺は創建の後先こそあれ、代々法燈のたゆることなく現在に及んでいるが、末寺末庵にいたっては既に遠い昔とんだもの、近ごろ消えて行ったものもあり、現存の庵寺も正に命脈が絶え果てようとしている状態である。

先ず宇山の白蓮庵、泥谷の西光庵、西野の圓通庵、浪越の東輝庵、石打の延命庵、府坂の大川庵、竹角の妙智庵、棚野般若庵、市福所福寺庵、谷川臨泉庵、山口延命庵、黒沢東光庵が現存しているが、僧侶の居住しているのはわずかに三庵、他はすでに無住、しかも荒廃甚しくいずれ倒壊してそのままになるか、ちいさな堂に建てかえられるかのいずれかであろう。昭和の初期までは無住の庵寺など一つとしてなく、皆立派に法燈を守っていたのに、一つかげ二つかげ、今日ではいよいよなくなるようになってしまったと言う感じである。

堅田路にかぎらず、佐賀南郡各地を探訪して、廃寺や廃庵の跡の多いのに驚かされる。そしてその跡は一見して屋敷跡とみられる平地があり、周囲に必ず供養塔や無縁塔または墓々と墓石がこけむしており、又は無雑作に積みかさねられている。

それらは何故か私どもの心ひかれるものがあるが、現存のものと合せて往時の寺や庵の数はおびただしい数であったことが想像される。中には廃寺の跡に創建されたという例もあったであろうが、とにかく無数の庵寺が簇出したことは間違いなかろう。

では何故この様に寺や庵は創建されるのか、なにがこの様に無数の寺院を生み出したのか、むつかしいことではあるが私は次の様に考える。

現代に比べて往時はたしかに生活はのんびりしていたであろうが、経済状態は今日よりよかったとは思えない。それに寺や庵を創建し維持して来たのは、何はおいても当時は土俗の信仰がつよかったからと言えるのではなかろうか。

秋迎に弟子たちが人間の死後のことについて教えを乞うても答えなかったそうである。

正覚に資するものではないと、人間に他世があると言うのはまことかも知れない。又あると言うのはうそかも知れない。けれどもそれは私どもにはいくら考えても、解決出来る問題ではない。たれも事実を証し得ないのだから、昔の人は殆んどが有ると信じたのではなかろうか。だから浄土信仰が盛んであったし、行住坐臥、南無阿弥陀佛の名号を唱える人もあった。そのように浄土信仰に仕合せを求めようとしたであろうし、楽土を来世に強く希求もしたことであろう。

又佛教は永い間因果のことわりをかかげて日本人に道徳を教えて来たが、その因果の概念こそ日本人を諦観にしばりつけ、正しい理性の行使をさまたげたと批判されているが、往時土俗は現実の生活が不幸であり又幸福であれば遠い祖先の所業がよかったとか悪かったからなどと真剣に考えたであろうし、子孫の仕合せを願ってひたすら善根に志したであろうし、積極的に仏縁に近づいて行ったことだろう。

あるいは又、人の力の及ばないところ、解決し得ないものはすべて祈願、祈禱によったのではなかろうか。勿論その中には違見の人もあり、無信心な人もあっただろうけれど……。だから何か重大なことがおこれば、お百度参りや千巻心経、あるいは何かを絶っての願かけとなったりした。

人間生きておれば笑うこともあり、泣くこともあろう、

あるいは勝つこともあろう、負けることもあろう。それが現実の姿である。それにもかかわらず物事が自分に都合よくはこばれてゆくように一生懸命に祈る、奇蹟を期待する。それが昔の土俗の心情であったろうし、現在も残っているかも知れぬ。とにかく寺に説教があっても参る人はなく、お百度をふむ人の姿も見かけず、千巻心経の話も今はあまりきかない。

数々の廃寺が消えてゆこうとしているように、昔の信仰上のならわしもまた消えさっていこうとしている。

ここで実例を一つあげよう。それは津志河内の福厳寺の現況についてである。この寺は天正年間の創立で寺歴も古く、最近までは堂々たる一ケ寺の構えを見せていたが、今は住職もいなければ僧もいぬ。堂宇は朽ちて雨は漏る。江国寺の住職がこの福厳寺の住職を兼ねて、辛うじて寺の体面を保っているが、果してこのような状態がいつまでつづくであろうか。近い将来必らず変革が来るような気がする。

こうした一連の推移を、おながち現代人の信仰心の低下とは云いきれまい。世は進んでいる。昔は神仏に祈願するより外に、どうともなし得なかった事が、今日では科学の力で解決出来ることが多い。一部の識者の間では人間死後の葬式の是非無用論がなされている現今である。

信仰は美しい事であり大切な事であるが、現代人には昔の人達の信仰を無批判にうけついで行くことは出来ない事であろう。

去りゆくもの、消えゆくものへの愛惜の情をもって、私は亡び行く堅田御の廃寺をとりあげ、その解明をこころみて来たが、所詮これは蟷螂の斧か象となるの類い、どなたか私の足らざるを補い、いや誤りを正して下されば幸いである。（終）

（委員会委員・佐伯市下堅田津志河内）

覚書

木立雑記

高木嘉吉
（住所　佐伯市　藤原）

はじめに

石松正水君は旧姓本矢、木立の出身で私の師範学校時代の同級生である。目下別府市朝見町二丁目一の九に住まれている。先日来信あり、以下に掲げる稿を寄せられた。木立のことがあれこれ記されていて興味深く読んだ。木立に出向いて実地を確めたいと思ったが、雑事に煩らわされて果たせないまま、とり敢えず転記して皆さんの参考に供することにした。後日実地踏査したいと思っている。

木立の開祖

昔、侍六騎が御屋木（ミヤノモト）で生活をはじめた。（木立の人はミヤンモトと言っている）しかし津浪が起り、波浦が強くて生活し難かったので、異地なる大野原に移り（現今の大野と原）、安全な土地を選んで永住の地とした。これが木立の開祖である。

これは本矢家に言い伝えられたことであるが、部落の古老も亦これを語り、原部落の兜王佐四郎翁も話していた。木本ヨシの先祖は御鷹山（ゴタカヤマ）の山麓、本田待佐の先祖は野原口（ハラグチ）の孟宗林の内、小川六次郎の先祖は妙見山麓の小さな川の辺り、久保理吉の先祖は山奥の窪地、新名利八の先祖は大樹あり竹藪ありて安全なる地帯、本矢剛吉の先祖は自然林の大樹あり竹藪のある安全なる地帯に居を